

[特集一第 12 回マレーシア総選挙]

2008 年総選挙見聞 (サラワク、サバ)

森下 明子 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・日本学術振興会特別研究員)

今回のマレーシア総選挙では、半島部で諸野党が大躍進し、5州で野党政権が誕生した。一方、ボルネオ島のサラワク、サバでは与党連合の国民戦線 (BN) が圧勝し、サラワクでは連邦下院 31 議席中 30 議席、サバでは連邦下院 25 議席中 24 議席、州議会 60 議席中 59 議席が、BN で占められた。ちなみに、サラワクでは連邦下院選挙のみが行われ、州議会選挙は行われていない。野党が勝利した選挙区は、連邦下院ではサラワク州の州都クチンとサバ州の州都コタキナバル、州議会ではサバ州南部のスリ・タンジョンのみである。いずれの議席も華人系野党の民主行動党 (DAP) が獲得した。これらの選挙区における DAP の勝因は、クチンとコタキナバルについては都市部で華人人口の多い地域であったこと、スリ・タンジョンについては華人地域であったことに加えて、サバ BN の内部対立により、同選挙区の BN 候補が受け取るはずだった軍人・警察官からの郵便投票 (postal votes) が BN の内部からの妨害により得られなかったため、DAP 候補が有利になったといわれる。

私はこれまで、ボルネオ島のインドネシア領カリマンタンで地方政治の調査をしてきたが、2 年前からマレーシア側のサラワク、サバにも足を伸ばすようになった。今回のマレーシア総選挙期間中は、サラワクとサバに滞在し、地元の新聞記者に同行して、野党が勝つかも知れないと噂された幾つかの選挙区を見て回った。特にサバは、連邦政府が総選挙において野党勢力の伸張を懸念していた州のひとつであり、結果としては BN の議席数が圧倒的に多いものの、BN 候補と野党候補の票差がわずか 100-200 票代の僅差であった選挙区は 5 選挙区あった (連邦下院ではサンダカン、州議会ではアピ・アピ、クアラ・ペニユ、ビンコール、ムロタイ)。こうした選挙区において、BN がさまざまな選挙工作を行ったことは言うまでもない。以下では、私が現地滞在中に得た見聞と地元新聞記者からの情報をもとに、今回の総選挙において、サラワクとサバではどういった選挙区で野党有利が噂され、それがどのような背景に基づくものであったのか。しかしそうした選挙区で、結局のところ BN が勝利したのはどのような理由によるものか。また、BN の選挙工作があったとはいえ、野党政権が誕生した半島部 5 州に比べると、サラワクとサバでは BN に票を投じた有権者が多かったといえるが、それはどうしてか。これらについて、見聞の限りで報告したい。

サラワク州

まずはサラワクから見ていく。サラワクには、マレーシアで唯一、連邦与党連合 BN の中核政党である、統一マレー人国民組織 (UMNO)、マレーシア華人協会 (MCA)、マレーシア・インド人会議 (MIC) の支部がない。ここでは地元政党が与党連合を形成し、2008 年総選挙では、ムスリムを支持基盤とするサラワク統一プミプトラ・プサカ党 (PBB)、華人を支持基盤とするサラワク統一人民党 (SUPP)、一般にダヤックと総称される非ムス

リム・ブミプトラを支持基盤とするサラワク人民党 (PRS) とサラワク進歩民主党 (SPDP) が、サラワク BN を構成していた。野党は、半島部と同じく DAP、人民正義党 (PKR)、汎マレーシア・イスラーム党 (PAS)、そのほかに BN の対立候補を支援したとして 2002 年にサラワク BN から放逐されたダヤック系政党のサラワク国民党 (SNAP) があった。

サラワクで野党勢力の伸張が噂されていたのは、クチン、スタンピン、サリケイ、シブ、ラナンといった華人人口の多い都市部を含む選挙区であり、DAP への人気が高いといわれていた。州東部の都市ミリも華人の多い地域であるが、ミリは SUPP 党首の地元であり、SUPP が票固めに成功していたため、野党の勝利はないと予測された。また今回の選挙では、都市部だけでなく、州北西部のマス・ガディンや内陸部のパラムにおいても BN の勝利に不安があるといわれた。これらの選挙区では、元州議員・元連邦下院議員が野党や無所属から出馬していた。ほかにも内陸部のルボック・アントゥとフル・ラジャンでは、PRS の派閥対立を背景に、一部の PRS 幹部が無所属候補を支援するのではないかといられていたが、PRS 幹部の話し合いによって投票日まで党内対立は解消し、BN の不安要因はなくなった。

選挙期間中、私はクチン、シブ、ミリといった都市部を訪れたが、インドネシアの派手な選挙戦に比べ、町全体の雰囲気は静かで、道路沿いの政党ポスターや旗、看板を除き、ほぼ普段と変わらない印象を受けた。また政党ポスターや旗、看板の数は、サバに比べて BN、諸野党ともに少なかった。聞くところによると、BN は演説集会と村々への戸別訪問、野党は演説集会を中心に行ったそうである。私はシブで DAP の街頭演説を聞く機会があったが、町の中心から少し離れた小さな市場に、雨模様にも関わらず、夜 7 時頃から 300-400 人の聴衆が集まり、市場の軒下も 2 階にある食堂も人々で埋め尽くされた。ちなみに食事代は各自の負担であった。演説は主に中国語 (北京語) で行われ、聴衆は饒舌な DAP サラワク州支部長 (シブ選挙区候補) のおもしろおかしい政府批判に聞き入り、時折笑い声を上げていた。町ではこうした演説集会が毎日、場所を変えて行われていた。一方、四輪駆動車やボートを駆使してやっとたどり着けるような内陸部の河川中・上流域の村々には、BN 候補がスピードボートやヘリコプターをチャーターして訪問し、村の集会所やロングハウスで演説、食事会、歌と踊り、カラオケなどが行われたという。

今回の総選挙でのサラワク BN の圧勝は、これまでの選挙と同じく、基本的に BN 候補による票買いと賭博の利用によってもたらされたといわれる。票買いは特に投票日の 2、3 日前から頻繁に行われ、村では小額のところでも一人 10-50 リンギット、町では野党の党勢が強いところになると、BN のボランティア・スタッフに登録すると最大で一人 1,500 リンギットが支払われたという。また賭博の利用とは、選挙期間中、町のあちこちで今回の総選挙で誰が当選するかが賭けられ、賭けの元締めと通じた BN 政治家が配当金の資金提供者となって、BN 候補に高いオッズがつけられた。そうすると、賭けに参加した人たちの大半は高いオッズの BN 候補に賭け、投票日には、賭けに勝つために、友人や隣近所の人々にも BN 候補への投票を促した。そうして BN 候補が当選すると、BN 候補に賭けた人びとには賭け金が倍になって返ってきた。言ってみれば票買いの変形パターンであり、こうした賭博がサラワクのいたるところで行われたという。

また、野党勢力が強いといわれたサリケイでは、BN が自党候補以外に、表向きには反

BN の無所属候補を擁立し、野党票の分断を図ったといわれる。投票結果を見ると、サリケイでは、1位の BN-SUPP 候補（10,588 票獲得）と 2位の DAP 候補（10,537 票）の票差がわずか 51 票しかなく、3位以下の無所属候補（3位が 545 票、4位が 116 票、5位が 105 票）が DAP 票を切り崩したことがうかがえる。また、野党候補のなかでも特に人気のあった DAP サラワク支部長が立候補したシブ選挙区では、近隣の選挙区の BN 支持者たちがシブに投入されたといわれる。シブ選挙区の投票結果は、1位 BN-SUPP（19,138 票）、2位 DAP（15,903 票）、3位 PKR（812 票）であった。

こうした BN による金と人の動員に加え、諸野党の敗北には、野党内の事情が反映していた。野党の党勢が強いといわれたスタンピンでは、DAP と PKR から候補者が出たため、野党票が二分し、さらに一部の地元 DAP 支持者が同選挙区の DAP 候補に難色を示したため、野党支持者の足並みがそろわなかったという。そのため、1位 BN-SUPP（21,966 票）、2位 DAP（18,896 票）、3位 PKR（2,198 票）という結果になった。またランアンでは、DAP 候補になった人物に十分な人気がなく、BN-SUPP 候補（19,476 票）が DAP 候補（14,612 票）に 5,000 票近い差をつけて当選した。もし DAP サラワク支部長がランアンから立候補していれば DAP が勝利していたといわれるが、ランアンの BN 候補であった実業家が、弁護士である DAP サラワク支部長の仕事上の顧客であったことから、ランアンの DAP 候補には敢えて人望の低い人物が立ったといわれている。

#### サバ州

野党間・野党内に不協和音がみられたサラワクと異なり、サバでは BN 政党間・政党内の亀裂が目立ち、選挙区によってはそれが野党有利の背景になっていた。2008 年総選挙において、サバ BN を構成していた政党は、ムスリムを支持基盤とする UMNO、カダザン・ドゥスンなど非ムスリム・ブミプトラを支持基盤とするサバ団結党（PBS）、統一パソ・モモグン＝カダザン・ドゥスン＝ムルット人機構（UPKO）、サバ人民統一党（PBRIS）、華人を支持基盤とするサバ進歩党（SAPP）、自由民主党（LDP）、MCA、マレーシア人民運動党（Gerakan）、インド人を支持基盤とする MIC であった。野党は DAP、PKR、PAS のほか、ムスリムを支持基盤とする地元政党の団結サバ人民戦線党（Bersekutu）と統一民主サバ人民の力党（Setia）、非ムスリム・ブミプトラを支持基盤とする統一パソ・ヌヌクラガン人国民組織（Pasok）があった。

サバにおいて野党勝利の可能性が噂されていたのは、連邦下院では州都コタキナバル、前回の 2004 年総選挙で無所属候補が当選したサンダカン、地元名望家のキティンガン兄弟が BN（PBS）と PRS に分かれて立候補したクニンガウのほか、ピナンパン、キマニス、ブルラン、コタブルッ、バトゥ・サピ、テノム、タワウなどでも野党票が伸びるといわれていた。また州議会では、2004 年総選挙で無所属候補が当選したクアラ・ペニユのほか、ムロタイ、ビンコール、スック、タンジュン・カボル、アピ・アピ、ラハッ・ダトゥなど、少なくとも 17 選挙区で BN の勝利に不安があったといわれた。

幾つかの選挙区で野党勢力の伸張が噂された背景は大きく分けてふたつある。選挙区によって詳細は異なるが、ひとつは有権者が BN 候補を支持するかどうか不安があったことである。都市部では一般に野党の人気が高く、また一部のムスリム地域では、サバ UMNO

の幹部人事に偏りがあるとして、サバ州首相である UMNO 州支部長に不満をもつ者が多かったという。またクニンガウでは地元名望家の兄弟が与野党に別れて対立し、ほかにも幾つかの選挙区で BN 候補が非地元出身者であったり、人望がなかったりしたため、BN の票獲得に不安があった。

野党有利が噂されたもうひとつの背景は、サバ BN の政党間・政党内争いであった。サバ UMNO では、クアラルンプールの UMNO 中枢部の不和を背景に、バダウィ首相を後ろ盾にした州支部長の影響力が弱まり、州支部内の派閥対立が統制できていなかった。そのためスラバヤン選挙区では、州支部長が決定した UMNO 候補に対し、ナジブ副首相派で同選挙区に影響力をもつ UMNO 地元幹部が難色を示したといわれる。PBS では、州首相と仲の良い党首とバダウィ首相と仲の良い党幹部の間で主導権争いがあったため、党内の足並みに乱れがあったといわれる。また州首相と LDP 党首には過去の政策をめぐる確執があり、LDP が候補者を出した選挙区には、州首相と良好な関係をもつ SAPP が LDP 候補を追い落とすために、無所属候補を擁立したといわれる。そのほか、選挙区レベルでの BN 地元幹部間の不和などにより、少なくとも 4 選挙区で BN 候補を追い落とすために、候補者を出していない BN 政党が無所属候補を擁立したといわれる。

選挙期間中、私はコタキナバル、ピナンパン、ブルラン、サンダカン、クニンガウなど、主に東海岸北部と西部の町を回ったが、目に見える選挙キャンペーンは、サラワクと変わらず、道路沿いや家々に掲げられた政党ポスターや旗、看板、そして毎夜開かれる演説集会が主であった。重要なのは水面下の BN の選挙工作であり、サバでは BN 勝利のために、違法移民（インドネシア人やフィリピン人）の動員や BN への複数回投票、票買い、軍人・警察官の BN 票などが大いに活用されたという。選挙違反である複数回投票が選挙工作として利用可能だったのは、本総選挙から導入されるはずだった重複投票防止のための特殊インクの使用が、投票日の 4 日前になって突如「治安上の理由」により撤回されたためである。インク使用の撤回によって、BN は容易に、フィリピン人やインドネシア人などサバに労働滞在する「外国人」に複数の身分証明書（IC）をもたせ、数箇所の投票所を回らせて、何度も BN に投票させることができた。コタキナバル周辺や州南部の選挙区では、投票日早朝、州各地から集められた「俄か有権者」たちがボートに乗って次々と近くの港に到着し、用意されたバスやワゴン車に分乗して、投票所巡りをしたという。サバでの「有権者」集めはさまざまな組織によって行われたといわれるが、東海岸南部では全国規模のイスラーム福祉組織 PEKIDA が、主にフィリピン人からなる「有権者」を UMNO のために 7,000 人調達したといわれ、同地域のラハツ・ダトゥには、そうした「有権者」が 4,000 人投入されたという。

連邦下院のサンダカンと州議会のアピ・アピでは、当選した BN 候補と 2 位の野党候補の得票差がそれぞれ僅か 176 票（BN-LDP：8,297 票、DAP：8,121 票）、174 票（BN-PBS：3,419 票、PKR：3,245 票）であったが、これは、軍人・警察官による BN 票が効果を発揮したといわれる。また州議会のピンコールでも、1 位の BN-UPKO 候補（4,589 票）と 2 位の PKR 候補（4,418 票）の得票差が 171 票しかなく、本来ならば PKR 候補が勝利していたといわれるが、投票所スタッフが投票終盤に BN 票を水増したため、BN 候補が当選したといわれている。州議会のクアラ・ペニユでは少し事情が異なる。ここでは、サバ

UMNO の元メンバーで前回の総選挙では無所属から当選した現職議員が、今回も無所属から出馬したが、後援者であるサバUMNO 幹部から選挙戦後半に十分な資金を受け取れず、票買いが満足にできなかつたため、BN-UPKO 候補に僅差（1位 4,416 票、2位 4,159 票）で敗北したといわれる。そのほかに指摘されている諸野党敗北の原因としては、同じ選挙区に野党・無所属候補が複数立候補したため、野党票が割れたことや、野党候補の人望が低かつたために野党に票が十分に集まらなかつたことが挙げられている。

最後に、BN の選挙工作があつたとはいえ、野党政権が誕生した半島部に比べると、サラワクとサバでは BN に票を投じた有権者が多かつたといえる。今回の私の限られた選挙見聞だけではその理由を分析することはできないが、代わりにここでは、私が現地滞在中に聞いた、BN に投票すると言つた人びとの積極的理由をいくつか挙げておきたい。BN 支持の理由としてよく言われたのは、BN 候補が自分の親戚縁者や友人、知り合いだというものである。ある野党支持者は、私に「連邦下院は野党に投票するが、州議会は妻の親戚が候補者なので BN に入れる」とこっそり話してくれた。また幾つかの選挙区では、現職の BN 候補が選挙期間だけでなく在職中も選挙区民への支援を行つてきたことを好ましく評価する人々がいた。また別の選挙区では、遠方の村の村落開発治安委員会（JKKK）のリーダーが、徒歩とミニ・バスを乗り継いで 12 時間かけて町の UMNO 支部事務所までやつて来て、村までの道路と学校の建設を望む要望書を UMNO 候補に渡そうと、党事務所前で待機していた。村の交通と教育の便をよくするには、BN に頼らざるをえないのが現実のようである。遠路はるばるやつて来た村人が手ぶらで帰るはずはなく、UMNO 事務所からは彼個人におそらく 500 リンギット、村の有権者には一人 50 リンギットがお土産に渡されるだろうと、隣にいた新聞記者たちが話していた。